View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Nichibunken Open Access

コメント

著者	RUTTERMANN Markus
雑誌名	JAPANESE STUDIES AROUND THE WORLD 2007
巻	14
ページ	69-71
発行年	2008-02-01
その他のタイトル	Komento
URL	http://doi.org/10.15055/00003723

【コメント】

Markus RÜTTERMANN
国際日本文化研究センター

報告者の劉岸偉氏は「『母語の外に出る』というようなことはもはや珍しい体験でなくなっている」といい、殊に「外国語で書くこと」を考察している。人間の長い歴史において、母国語の域を出ること自体は昔からの経験が山積している一方、過去も現在もこの経験に加担している人口の比率は少ない。ところが、言葉の域を変えて生活する人口の絶対数はたしかに増えている。その中で作文活動に報告の焦点が置かれている。それは有意義な問題提起であろう。

母語の域を出る、と言えば、家族の言葉文化もあれば、地方の言葉もあり、地方都市の言葉もあれば、首都の言葉も、高貴な言葉もあれば、土俗のいわゆる卑しい言葉もあり、しかも業種、性、年齢、民族などによって言葉の慣習が定着している。それが文化の基礎をなす要素の一つとして周知されている。男女関係や家族同士、村落の間で、または個人同士でもそれぞれの言葉の域の境界を越えて、相手に理解を求める、相手を理解したがることが日常茶飯事である。にも拘らず、家族から国や文明といったレベルに至るまで、難解な自己を如何に自覚し、そして如何に相手に知らしめうるかは実に重大な課題である。劉氏はこの問題を外国語としての作文活動を行って来た大家を通じて考えている。マテオ・リッチは『交友論』でもって、夏目漱石は『木屑録』でもってそれぞれ中国古典文を通じて、母国語と異質な表現界に移った。発表者の指摘通り、それは主に文章や文体の表現であり、文の記号に留まる。リッチがどれほど口語を交えても、「論」としてはそれは文体に過ぎない。同じく、漱石も中国の発音や声調を知らずして、あくまでも文体としての表現法を身に付けていたことを忘れてはならない。新渡戸稲造も、林語堂も英語作文の実績は同様。

発表者の選択した著述家はほとんど異文化に対して自己の「文化」を広く知らしめ、理解させる意図があったようで、そして場合によっては、それ以上に理想や価値観や信仰に帰依させる意向さえあったと

思われる。中国の古典文であれ、英語であれ、他者の分りやすく、納得しやすい方法が望まれた故、読者の馴染みがあって、通じやすい話題と言葉を盛込んだ妥協的解説に目的があったに違いあるまい。尤も、リッチが中国で朋友という、五倫の一つを通じて地中海ヘレニズム文明を汲んだキリスト教で支配的な概念の友情を布教した如く、新渡戸が英語圏で武士道を西洋思想史的に「再解釈」したように。ひいては「決して質の高いものだったとは言えない」、「すぐれた会話能力」、「立派な漢文訓読体」などのモラリズムに近い評価付けはさておいて、質的な分析に従えば、少なくとも文体において二通りの傾向が認められるようである。即ち一方では他者への対応の結果、もともと伝えている対象そのもの（自己の文化的趣き）の写実性を損なって、僻みある見解をもたらすか（新渡戸、林）、或いは逆に、伝えている対象への対応の結果、写実性の高い表現をしめしつつも、他者（読者）の言葉に僻みある調子や語義をもたらすか（リッチ）、いずれかの方向に傾きがちな側面がある、というふうに劉氏の取り上げる例を絞れるといえば先ずは的を外さないと思う。尤も、その内面的葛藤は林の求める「中庸円満」の難しさに凝縮されている。

しかし、「中庸円満」を巡って論を展開すれば、私観・客観の問題、意識状態や研究方法の要素、感性と理性との関係など、問題の種類は幅広く追求すべく、果たしてそれが「母国語の域を出る」ことに内在している特質なのかはさておいて、かかる問題提起を「フォニー」（音声）に関連づけるならば、それこそは如何。反って作文活動の事例では原則的に音声のところまで追求することは無理ではないといっても、劉氏の選んだ事例では音声研究に至らないと思う。そして事実、発表者自身が「外国語で書く」ことや、とりもなおさず「文体」や文章の「規範意識」に主眼をおいて、なおかつ言葉の教育現場での模範文章の訓練を奨励している。

従って、発表者の結論は音声と別の境界へ導いてくれるような気がする。略して対照例で明確に結ばせていただきたい。地中海の古代文明の伝承を汲んだ西洋の伝統の神髄を敢えて一手で握ってみれば。ヘブライ語圏の聖職者でさえが信者に対してギリシャ語の神話や説教、詩や教材を使用し、聖書までギリシャ語に訳した形跡をはじめ、音声文字を経て、音声の色彩の濃い伝承が綿々と形成され、そしてそれが

ラテン語圏にも受け継がれた傾向に比較してみれば、中国古典文体（いわゆる漢文）は遥かに、いや、多くの場合はほぼ完全に「フォニー」から懸け離れてしまう性質をしめすのである。思うにこの「フォニー」・音声の欠如の比重としての特質にこそ結論の主旨及び今後の研究の意義があるかも知れない。